盗み病 クレプトマニア ㊦

あの…。やってはいけないことを何回も

▶▶▶ 治療先進地 群馬の病院で

更生目指し苦しみ吐露

衝動的に盗みを繰り返す精神疾患「クレプトマニア」（窃盗症）。群馬県渋川市の精神科病院「赤城高原ホスピタル」は、同疾患治療の先進地と言われている。北は北海道、南は沖縄から、クレプトマニアやその疑いのある患者が訪れる。

「心の傷」が原因

「あの…。やってはいけないことを何回もやってしまいまして…」。同ホスピタルの診察室で40代男性が告白した。対面する医師に向け、盗み癖に長年苦しんできた思いを絞りだした。

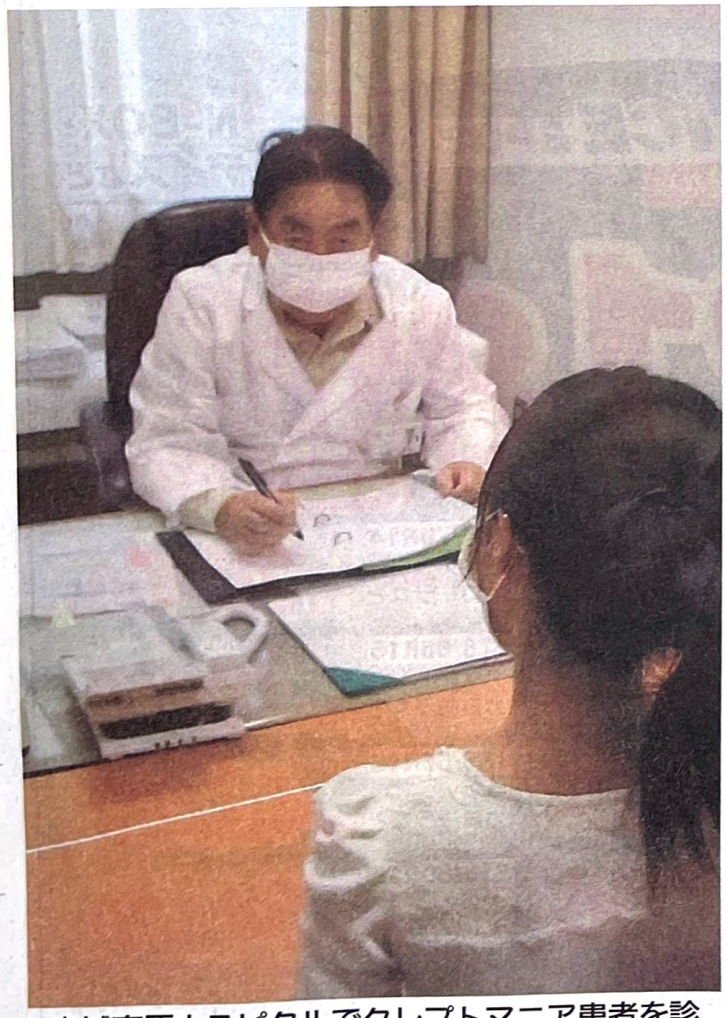
この疾患が発症する要因の一つとして、虐待などで生じた幼少期のトラウマや家庭環境、心理的ストレスがある。治療は長期間に及び、治療をやめた途端に再発することも多く、同ホスピタルでは断続的に10年間通院する人もいる。入院の場合は、通常3カ月～1年ほどで盗みの衝動が収まり、回復に向かうという。

竹村道夫院長(76)は同疾患治療の第一人者で「時間はかかるが、患者が盗みについて正直に話せるようになると、治療も進む」と回復への道筋を説明する。

竹村院長はクレプトマニア専門外来がある「京橋メンタルクリニック」（東京都中央区）でも週1回、治療を担当。群馬県のホスピタルと合わせ、これまで2千例の窃盗常習の患者を診てきた。

自助グループも

同ホスピタルが果たす役割は、診察や治療だけではない。通院や入院を経験した元患者たちが地元に戻った後、クレプトマニアの自助グループを立ち上げている。「KA（クレプトマニアクス・アノニマス）」の名称で、当事者同士のミーティングの開催などを手掛ける。2004年に最初の自助グループが東京都内で立ち上がり、今では首都圏や関西、東北などに広がり、約30団体にまで増えた。



赤城高原ホスピタルでクレプトマニア患者を診察する竹村院長（奥）。治療の第一人者として患者と日々向き合う（同ホスピタル提供）

だが、今のところ道内に自助グループはない。竹村院長は「身近に自助グループがない地域は疾患自体への理解が進まず、治療につながらないケースが多い」と指摘する。

では、旭川など道内の窃盗常習者やその家族らはどうすればいいのか。

クレプトマニア医学研究所（東京）の福井裕輝所長(52)＝精神科医＝は「まずは医療機関で診察を受けてほしい。クレプトマニアではなく、認知症などが原因のケースもある」と話す。その上で、症状に応じて専門的な治療を受ける必要があるという。

ただ、旭川市内のある医療関係者は「窃盗症は専門の医師も少ないため、旭川など地方都市では患者の受け皿になりにくい」と明かす。

今も、道警旭川方面本部管内では毎週数件、窃盗容疑の逮捕歴がある人たちが、万引などで再逮捕されている。刑事罰では根本的な更生につながらない「証明」とも言える。